

国語科若年教員の研修の在り方に関する考察

—オーナーシップに着目した参加者の主体性育成の観点から—

川田 英之
(附属坂出中学校)

762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校

Consideration on the Way of Training for Young Teachers of Japanese: From the Perspective of Cultivating the Independence of Participants with a Focus on Ownership

Hideyuki Kawata

Sakaide junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037

要 旨 若年教員を対象とした国語科の自主研修会を組織し、2年間の取組を行った。その取組を評価する際に、若年教員の主体性育成の観点から、オーナーシップに着目し、考察した。所属学校の枠を超えた「横のつながり」による協働的な学びの場としての自主研修の意義が明らかになった。同時に、研修を主催するリーダー育成等の課題も確認できた。

キーワード 自主研修組織 主体性 横のつながり 協働的な学び オーナーシップ

1 はじめに

現在、教員の大量退職と大量新規採用に伴い、学校現場においてもベテラン教員の専門的な知識や技術の伝承が課題とされている。教員の年齢構成のバランスが取れた組織であれば、勤務校での研修や、県、地域の公的な研修組織の中で、こうした伝承が自然に行われ、スムーズな世代交代がなされてきた。また、授業力に関しても、校内外の研修組織で学ぶ中で、知識や技術の伝承がなされるとともに、指導力の向上が図れていた。しかし、現在は団塊の世代と若年教員の間の中間層の教員数が極端に少なく、学校内での研修が効果的に行われていない現状がある。さらに、若年層の教員が学校や地域の大半を占める学校も珍しくなくなり、これまでの研修体制そのものが維持できないことも増えてきた。こうした状況は、研修への参加意識の低下等にも表れている¹。複雑化・多様化した課題を抱え、学習や生徒指導上様々な問題が散在する現在の学校教育において、若年教員の力の育成は、緊急の課題である。

こうした課題に対し、筆者は前稿²において、教師としての資質を「A 授業力」「B 生徒指導力」「C 自己研修力」「D 熱意や情熱」「E 組織力」の五つと捉え、図1のように示した。とりわけ、校内の組織力が弱まっている現状から、勤務校を超えたベテラン教員との「縦のつながり」や、若年教員同士の「横のつながり」を構築するための「E 組織力」の重要性、さらには、「相互に学び合う研修の姿」「協働的・相互的な学びの場としての、新たな自主研修組織」の構築が現状の課題を克服する方法であることについて考察した。

本研究では、前稿の構想を実践しての成果と課題から、若年教員の授業力向上のための研修の在り方につ

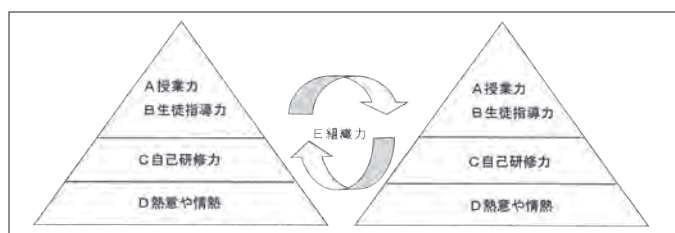


図1 教師の資質の要素 (筆者作成)

いて再度考察することを目的とする。筆者は、構想に基づき、自主研修組織を作り、2年間にわたり、全18回の研修を実施した。18回の研修終了後、参加者を対象に振り返りを行った。その振り返りを分析しての成果と課題から、若年教員の授業力向上に必要となる要素について考察する。とりわけ、参加者のオーナーシップ³の観点から、教員が主体的に参加する研修のあり方について提案するものとする。

2 教員の主体性の向上とオーナーシップ

法的に定められている教職員の研修は、初任者研修、中堅教諭等資質向上研修、指導力向上研修がある⁴。令和4年度には、教員免許更新制が廃止された。よって、「絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」⁵「職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」⁶とされる教員にとって、今後、一つ一つの研修が、その場限りのものに終わるのではなく、研修を契機とし、教員自身の学び続ける主体性を向上させるものであることが求められる。図1によるならば、研修内容の中心となる「A 授業力」「B 生徒指導力」を学ぶ際にも、「C 自己研修力」「D 熱意や情熱」を高めることを主眼とする主体性の育成が、今後の研修においては特に重要視されるべきであろう。

しかし、主体性を評価し、研修の在り方に反映していくための研修の方法が明らかになっていない現状がある。例えば、研修後に参加者にアンケートを取り、研修での主体性を参加者自身に評価させる活動を行ったとしても、主体性はその時の研修内容の付加的な要素として評価されることが多く、参加者の研修自体における主体性を正確に反映していると言えない場合があるからである。主体性を発揮して研修をしている参加者の姿がどのようなものかという実態も十分に明らかでないという問題もある。

そこで、教職員の研修への主体性を高めるための方策について考える上で、学習者の主体性に直接的に焦点を当てた、オーナーシップに着目した。オーナーシップとは、個人が与えられた職務やミッションに対して主体性をもち、取り組む姿勢やマインドのことを言う。自分自身の業務に対する役割理解・パフォーマンスを最大化させる方法など、自分自身のセルフマネジメントを意味し、自分自身に関わるという点で、チーム全体に関わるリーダーシップと異なる。

オーナーシップの意識を高めるためには、Milner-

Bolotinの指摘⁷が参考になる。

Milner-Bolotinは、オーナーシップの意識を構成する三つの要素を明らかにし、学習者が学習活動に対して抱くオーナーシップの度合いを、それぞれの構成要素を学習者がどれほど意識できているかという度合いのグラデーションとして、図2のように捉えている。

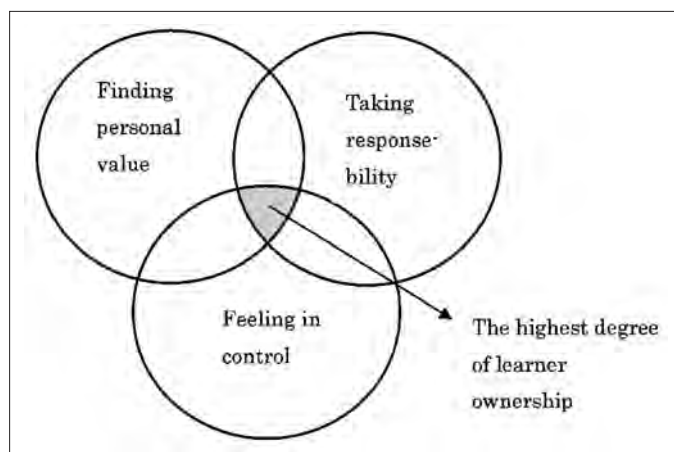


図2

学習者が「個人的な価値を感じること (finding personal value)」「思いのままになると感じること (feeling in control)」「責任をもつこと (taking responsibility)」という三つの構成要素が相互に関わり合うことで、学習者が学習活動に対して抱くオーナーシップの意識は高まっていくとしている。

Milner-Bolotinが示す三つの構成要素から筆者が行った教員の研修に対する認識を評価すると、どのような実態を捉えることができるだろうか。主体性を発揮して研修に参加している教員の実態を検討するための調査の結果を次に示す。

3 研修の組織と研修内容

筆者は、令和2年4月から、香川県中学校教育研究会三豊観音寺支部国語部会という自主研修組織をベースとし、協力者⁸とともに香川県三豊市、観音寺市の5年経験以下の若年国語科教育を中心とした研修会(通称「勉強会」と称した)を新たに立ち上げた。おおよそ、長期休業期間を除く毎月1回、勤務時間後の夕方、1回90分間程度、参加できる教員が自主的に参加する形式の研修を実施した。

実施した研修の内容は以下のとおりである。(研修内容、実施年月日、参加人数の順に記載。⑬の参加人数が多いのは、特別に平常日の研究授業と重ねて行ったことによる。また、教員の異動等により、令和2年

度だけ参加した教員，令和3年度だけ参加した教員もいる。)

- ① 文学的な文章Ⅰ 三読法と芦田恵之助「冬景色」の授業 (R2.6.25) 11名
- ② 文学的な文章Ⅱ 分析批評 (R2.7.30) 11名
- ③ 文学的な文章Ⅲ 読者論 (R2.8.27) 12名
- ④ 文学的な文章Ⅳ 新教材「辞書に描かれたもの」教材研究 (R2.9.17) 10名
- ⑤ 説明的な文章Ⅰ「スズメは本当に減っているか」筆者による模擬授業 (R2.10.15) 11名
- ⑥ 説明的な文章Ⅱ 新教材「私のタンポポ研究」教材研究 (R2.11.12) 12名
- ⑦ 単元学習と大村はま (R2.12.10) 12名
- ⑧ 文学における「語り」(「少年の日の思い出」) (R3.1.21) 14名
- ⑨ 文学的な文章Ⅴ 発問研究および筆者，協力者による模擬授業(「私と小鳥とすずと」「初恋」) (R3.3.4) 15名
- ⑩ 研究の方向性と「境界線上の教材」について (R3.5.20) 19名
- ⑪ 授業研究「走れメロス」(VTR発表 F中T先生) (R3.6.10) 18名
- ⑫ 授業研究「絶滅の意味」(VTR発表 T中H先生) (R3.7.15) 15名
- ⑬ 深い読みを行うための対話の効果的な組織化 (R3.9.16) 17名
- ⑭ 授業研究「私のタンポポ研究」(VTR発表 T中O先生) (R3.10.14) 12名
- ⑮ 授業研究「Lemon哀歌(「レモン哀歌」米津玄師「Lemon」)」(VTR発表 N中O先生) (R3.11.17) 19名
- ⑯ 研究授業「走れメロス」(C中N先生) (R3.12.9) 27名
- ⑰ 読みの方略の転移(筆者によるVTR発表)・「ごんぎつね」教材研究 (R4.2.4) 17名
- ⑱ 授業研究「ごんぎつね」(VTR発表 K中Y先生) (R4.3.17) 17名

研修の内容は，図1の「A 授業力」の向上を図ることを目的とし，国語科の「読むこと」領域を中心に行った。ただ，先に述べたように，「C 自己研修力」「D 熱意や情熱」としての主体性を向上させることに主眼を置いた。筆者および協力者はベテラン教員として研修の運営に関わったが，基本的に「協働的な学びの場」の構築を目指し，教材観や指導論を教示したり

誘導したりしないように心がけた⁹。ただ，全ての研修を協働的に学ぶ場としたのではなく，「読むこと」の指導のベースとなる理論を中心とした学びの機会も必要であるとの判断から，講義形式中心の研修7回(①②③⑦⑧⑬⑰)も挟みながら実施した。実際の授業(模擬授業や授業VTR)を基に実施した研修は9回(⑤⑨⑪⑫⑭⑮⑯⑱)である。

18回の研修後，研修全体を振り返ってのアンケートを実施した。回答した教員は14名である。

4 オーナーシップの観点からの分析

(1)「個人的な価値に関すること」に関する質問について

研修を自分事として捉えるためには，教員が研修について，自分なりの価値を感じている必要がある。

「自分にとって価値のあった研修」について質問した(複数回答可)。結果は，表1のとおりである。

表1 価値のあった研修

研修番号	人数
⑮	10名
⑰ ⑱	9名
⑤ ⑧ ⑬ ⑯	5名
⑨ ⑩ ⑪	4名
② ④ ⑥ ⑫	3名
① ③ ⑦ ⑭	1名

のべ76名(1回平均4.2名)の教員が価値のあった研修を挙げていた。回答した14名の内，最も多く選択した教員は18回，最も少ない選択は1回である。(これは参加した回数にもよる。)選択をしなかった教員は0名であった。

研修の形式で分類すると，理論を中心とした講義形式中心の研修7回(①②③⑦⑧⑬⑰)を選択した教員は25名(1回平均3.6名)，協議中心の研修11回(④⑤⑥⑨⑩⑪⑫⑭⑮⑯⑱)を選択した教員が51名(1回平均4.6名)であった。協議中心の研修を選択した教員が多いのは，「協働的な学びの場」の構築を目指した研修会の目的上，予想されたことではある。講義形式の研修よりも，協議形式の研修のほうが，教員はより価値を感じていたことが伺えた。

ただ，その理由を自由記述で回答したのを見ると，共通点も見られた。協議形式の研修を選んだ理由としては，次頁のようなものが挙げられた。(括弧内は研修番号)

- ・「レモン哀歌」と「Lemon」の比較については、自分の考えることのできなかった授業であった。今まで小学校の文章と中学校の文章を比較することはあったが、歌と詩というジャンルの異なったものの比較は行うことがなかった。ジャンルが異なっても、工夫次第で子どもたちの思考を深めることができると知った。(15)
- ・「大きく切る」「広く問う」ことがいかに大切か実感できた。今年度は特に色々な実践を具体的に学べたので、本当にどの勉強会も楽しく、刺激的で参考になった。(記述無し)
- ・教科書から離れた教材でも色々な授業が展開されていておもしろかった。発問の仕方・内容が、自分では考えつかないような意見が出ておもしろかった。(9)

協働的な学びの中で、参加者が気づきや学んだことの意義等を感じていることが伺えた。

講義形式中心の研修に価値を選んだ教員の自由記述の主な内容は、以下のようなものであった。(括弧内は研修番号)

- ・理論の基礎を知ることで、様々な理論を相対化して捉えられるようになったと感じる。(1②③)
- ・文学における「語り」や発問など、新しい視点から授業を考えることができそうな学びがあり、非常に参考になった。(8)
- ・学習が苦手な生徒への支援の足がかりとして、特性を把握することで、新たな視点を提示できることが分かり、実践してみようと思いました。(13)
- ・方略の学習は意識して授業に取り入れるようにしているが、その転移をうまく生かせていないので、実感させられていないと改めて感じた。(17)
- ・読者論の立場から「どう読んでいくのか」という読み方を一緒に考えていくことや「象徴」「比較」などの「読みの方略」をもとに授業を構成していく研究の仕方など、多くのことを学ばせてもらいました。(2③⑩)
- ・最初に作者論や読者論などの理論について学べたので、自分がどのような立ち位置に立って授業をしているのか、授業をしていきたいのかについて意識することができた。(1②③)

講義形式中心の研修に価値を感じた内容として、「学習特性」「方略」「読者論」といった、授業理論や授業方法について新たに学んだこと、新しく気づいたこと等が書かれていた。講義形式中心であっても、協議形式中心の研修の理由として挙げられたのと同様、参加者が自分自身の授業とつなげて考えられれば、価値を実感していたことが伺えた。講義形式、協議形式によらず、自分とつながりのある、自分にとって価値があると感じる研修であれば、教員は主体的に学ぶのである。

ただ、総じて講義形式中心の研修を選んだ教員が協議形式中心の研修より少なかったことから、講義形式の研修を行う場合には、自分自身の授業とつなげていけるような手立てや工夫が必要である。例えば、講義というインプットの時間と協議の場というアウトプットの時間をバランスよく設定したり、授業実践について考察したりする際に、もう一度講義内容に立ち返ったりする場の設定が必要である。

(2)「思いのままになると感じること」に関わる質問について

研修を自分事として捉えるためには、教員が研修を自らの判断や意志に基づいて自律的に進めていると感じている必要がある。

本研修は、基本的に自由参加であり、教員は自らの意志に基づいて参加している。その上で、「研修を自分たちの力で考え、解決したと感じたことはあったかどうか」について質問した。結果は、次のとおりである。

表2 研修を自分たちの力で考え、解決したと感じたことはあったか

ある	9名
ない	4名
どちらともいえない	1名

この結果については、「ある」と回答した教員が多いものの、「ない」「どちらともいえない」と回答した教員も少なからずおり、評価が分かれた。

「ある」と肯定的な回答した教員の理由についての自由記述を見ると、「素朴な質問が聞ける点がよかった」「積極的に情報交換をしながら解決した」「多くの先生方と意見を交わしながら国語の授業と向き合うことができた」など、協働的な学びの中で課題解決に取り組んだことを理由として挙げていた。一方、「ない」

と否定的な回答した教員の理由についての自由記述を見ると、「毎回の設定されたテーマについて考えたから」「課題についてみんなで考えたが解決はしていない」等であり、協働的に話し合う場はあったものの、自分たちで課題を設定し、協議する場がなかったこと、また、協議したものの、自身の課題解決に至らなかったことを理由として挙げていた。

研修開催者である筆者は、主体性育成の観点から、教員自身が、自分の意志により、自由に参加する研修形式とした。また、各課題は開催者側で設定した上で、1回1内容完結の形をとった。さらに、各課題について協議した後、開催者の意見や主張を押しつけることなく、オープンエンドにして、自分たちでさらに考えを深めていけるようにした。

しかし、若年教員にとっては、自分たちが今抱えている課題について協議する場や、明確な回答（指導）の場を求めていることも明らかになった。

(3) 「責任をもつこと」に関わる質問について

研修を自分事として捉えるためには、参加の教員が研修の取り組みに対し、自分なりの責任感をもっている必要がある。

まず、「研修で、他の参加者の学びに貢献したか」について質問した。結果は、次のとおりである。

表3 研修で、他の参加者の学びに貢献したか

ある	5名
ない	7名
どちらともいえない	2名

この結果については、「ある」と回答した教員よりも「ない」「どちらともいえない」と回答した教員が多い結果となった。「ある」と回答した教員の理由についての自由記述を見ると、「他の参加者と意見を交わし合いながら理解を深めたから」「積極的に話し合いに参加したから」「(全体場で) 授業発表したから」と、協働的な学びへの貢献を理由として挙げていた。一方、「ない」「どちらともいえない」と回答した教員の理由についての自由記述を見ると、「教えてもらうことが多かったから」「他の人の意見は参考になったが、自分は(全体で) 発表していないから」というものであった。

本研修は、若年同士の研修という点を考慮し、筆者は課題等を特に課すことなく、「誰でも参加したいときに気軽に参加できる」研修形式をとった。それが参

加へのハードルを下げ、研修に対する主体性を向上させた面はあったものの、研修の活動自体に関する「責任をもつこと」の意識自体は高まらなかったと考えられる。

さらに、研修に責任感を感じていたかどうかについて、「研修を自分の授業に活かした点はあるか」について質問した。結果は、次のとおりである。

表4 研修を、自分の授業に活かした点があったか

ある	13名
ない	1名
どちらともいえない	0名

13名が「ある」と回答していた。具体的にどのような点かについての自由記述は、次のようなものが挙げられていた。

- ・発問の内容を参考にした。
- ・学んだグループ学習を授業に取り入れた。
- ・広く問うことを意識して授業づくりを行った。授業が子ども主体へと移っていくのを実感できた。
- ・これまでの学習の中で、読みの方略を身に付けたか振り返る活動をした。
- ・Lemon哀歌を実践してみました。Lemon哀歌へ着地できるように意識しましたが、Lemonの読み取りがいまいちでした。
- ・話し合いの中で「少年の日の思い出」のイラスト比較というアイデアが出てきた。また、比較において、ベン図の使用という要素も知ることができた。実際に授業を行うと、想像以上に子どもたちからいろいろな意見が出てきて、自分としてとても勉強になった。

ほとんどの教員が研修で気づいたり学んだりしたことを自分の授業に取り入れて実践していた。研修で取上げた授業をそのまま行ったり、研修をベースに新しいアイデアで授業を行ったりした教員もおり、研修の活動自体には責任をもっていなかったものの、学んだことについては責任をもち、その後の自分の授業に取り入れていたことが伺えた。

「ない」と答えた教員の自由記述は「校内ではICT活用を進めているため、少しギャップがあった」と、校内研修とのつながりが見いだせず取り入れられなかったことを理由として挙げていた。(2)でも分析したが、そうした教員のもつ課題を取り上げて全体の

研修テーマとする機会があれば、「責任をもつこと」の意識はより向上したと思われる。

また、研修後半(⑭⑮⑯)では、現在担当している学年ごとの小集団に分かれ、授業構想を話し合い、各校で実践し、代表者が発表する形を取った。それについては、「その他」の自由記述欄で、次のように書かれていた。

- ・みんなで作った指導案で研究授業したのがよかった。
- ・発問の仕方・内容が自分では考えつかない意見もたくさん出て、みんなで発問を検討していくことがよかった。
- ・自分の授業発表を、みんなで討議できたので、さらにより授業を作りたいと思えた。

こうした研修の形を採り入れていくことが、参加者の「責任をもって参加する」意識の向上につながるということが分かった。

(4) その他

「国語の授業や指導法以外で役立ったこと、良かったこと等」について質問した。主な回答は次のとおりである。

- ・他校の先生方とのつながりができたこと。
- ・三観の先生方とたくさん知り合えた。(高松出身なので特に。)
- ・他校の生徒の状況などを知れたこと。
- ・同じ年代の先生と交流できるのは本当に良い。刺激になる。
- ・いろいろな人と話をする機会が増えたのが良かったです。意見の交流ができて楽しかったです。
- ・情報交換をすることで、自分の授業の振り返りにもつながった。
- ・普段の生活でも国語教材として使えないかと考えるようになった。
- ・堅い考えしか持っていなかったのですが、他の先生方と交流し、考え合うことで、柔軟に対応できるようになりました。
- ・定期的な教科部会が各校で開かれなくなっていますし、1学年を1人の教師で教えることが多いので、国語科同士でも教材研究について話し合うことはほぼない現状です。そういう意味で

も楽しい会でした。

回答した11名の内、他校の先生方との交流や意見交換を理由として挙げた教員は9名、自分自身の変容を理由として挙げた教員は2名であった。

次に、「本研修と他の研修(公的な研修や学校内の研修等)と比べての違い」について自由記述で質問した。主な回答は次のとおりである。

- ・素朴な質問が聞ける点がいいです。若い先生方の考えが聞けたので良かったです。
- ・実践できることが多かったのが良かったです。
- ・国語専門ということで、出てくる意見がとても国語的であったこと。
- ・すごく深い学びができたと感じた。ずっと一緒に勉強会を重ねてきたメンバーなので、本音で議論できたと感じた。
- ・より実践に近い研究が受けられて、大変勉強になります。
- ・実践+講義形式なので、自分の学びにつながった実感がある。
- ・国語のことについて深く学べる。国語科の教育法、教育論、歴史について学ぶことができる。
- ・勉強会のほうがアットホームで気軽な感じがして良かった。それでいて活発だと思う。

回答した9名全員が、専門としての国語を、ほぼ同じメンバーで、所属学校の枠を超えて学び合うことを理由として挙げていた。

5 運営者の意識から

運営者側の意識について、筆者と一緒に運営を行った協力者に、オーナーシップの観点から振り返りを依頼した。結果は次のとおりである。

(1)「個人的な価値に関すること」に関する質問について

○研修に価値を感じていたか

回答(はい)

自由記述

まず、若年教員同士の横のつながりができたことが大きい。

次に、若年教員が自信をもって授業に取り組めるようになったことに意味がある。大学でも、実

実践的なことを学んでいるだけでなく「国語ってどう教えたらいいのだろう？」という意識であったと思うが、国語教育の歴史の流れや、今の教育法の主流について学ぶことで、自信をもって授業研究に取り組めるようになったと思う。

研修の様子から、若年者はしっかり考えていると思える。この研修以外でも若年者の授業を見る機会があったが、研修で学んでいたことを活かした授業を行っており、成長を感じた。

(2) 「思いのままになると感じること」に関わる質問について

○研修を自分たちの力で考え、解決したと感じていたか
回答（どちらでもない）

自由記述

主に（運営者側が）毎回の課題を設定していたので、若年教員が自分たちで課題を解決したという意識はあまりなかったのではないかと。ただ、ほぼ月1回こうした機会があることはよかった。運営者側としては（筆者と）毎回相談しながら運営することができた。月1回の研修の中で、若年教員も自分たちで考える機会がもてたのではないかと。自分自身としては、自分たちの力で考え、運営していったと感じる。

(3) 「責任をもつこと」に関わる質問について

○研修で、若年者の学びに貢献したか。

回答（はい）

自由記述

まず、こうした若年教員の学びの場を与えたこと、毎回の研修内容を考え、講師を選定したこと、これだけで成功であった。また、（筆者と）打ち合わせをして研修に臨んだため、毎回の研修に、参加者は充実感をもっていったと思う。

(4) その他

参加の若年教員全員ではないが、主体性をもった人が多かった。他の研修の場でも、自信をもって言えるのではないかと。以前は、こうした自主研修があったことを知らない教員がほとんどになっ

た。この研修をまだまだ続けていきたい。今度は若年の先生方が主になってできるようになればよい。また、知り合った仲間同士で集まり、自主的に考えていくようになれば良いと思う。

若年教員の「思いのままになると感じること」の意識は弱いものの、「個人的な価値に関すること」「責任をもつこと」の意識は高く、教員の主体性の育成につながったとの見解が、協力者の振り返りからも伺えた。これは、若年教員の振り返りとも一致した。

また、運営者側の視点からは、「個人的な価値に関すること」「思いのままになると感じること」「責任をもつこと」の3観点全てにおいて、ほぼ肯定的な評価をしており、主体的に研修会を運営したことが伺えた。

6 終わりに

本実践および研究から、オーナーシップに着目することで、教員の研修に対する主体性を測ることができると、改善点を見出すことができることが明らかになった。

筆者が実施した研修会の特徴を挙げると、次の6点である。

ア 所属学校を超えた専門教科の若年教員同士の「横のつながり」を構築し、組織力の高まりを目指したこと。

イ 参加を強要することなく、教員が自らの意思で参加する形にしたこと。

ウ 参加者同士が協働的に学び合う場の構築を目指したこと。

エ 理論と実践の融合を目指したこと。特に、参加者が自らの実践とつなげて考えていけるような内容を意識して行い、参加者が自分の授業でも実践したこと。

オ 授業力だけでなく主体性を高めることを主眼としたこと。

カ ベテラン教員としての筆者および協力者が若年教員にかかわっていく「縦のつながり」があったこと。

研修を自分事として捉える意識としてオーナーシップに着目すると、本研修に対し、参加者は概ね主体性（上記の特徴オー以下同じ）を発揮していることが分かった。これはオーナーシップの三つの要素「個人的な価値を感じること」（アウエ）「思いのままになると

感じること」(イ)「責任をもつこと」(エ)を、参加した教員が意識できていたからだと考えられる。

近年は、学校内での研修や公的な研修においても、ウヤエを意識した参加型の学び合いの研修の場が増えてきた。しかし、そこに主体性が生まれにくいのは、同教科のほぼ同年齢の教員が、自身の専門について学び合うこと(ア)、参加者が自らの判断や意思に基づいて自律的に研修を進めること(イ)、の機会が少ないためと考えられる。その意味において、前稿でも考察したように¹⁰、自主研修の場であることの意義は大きく、今後も求められると言える。

もちろん、校内の研修や公的な研修でも、オーナーシップの観点に着目し、アやイの要素を研修内容の中に採り入れていくことで、教員の主体性の向上につなげることは可能である¹¹。ただ、教員の働き方改革が叫ばれている現在においてこそ、校内の研修や公的な研修とは性格が異なる自主研修—参加者が自ら選択し、同じ専門性をもつ教員同士が研修していく形式—は、教員の主体性育成により効果があるのである。主体性の向上は、自ら学び続ける教員としての資質の基盤となるであろう。

今後の課題として、2点挙げられる。

1点目は、研修内容の改善の課題である。オーナーシップの要素の内、「思いのままになると感じること」「責任をもつこと」を、より向上させる必要性が明らかになった。今後、参加者からボトムアップ的に課題を取り上げた協議する場をもつこと、課題を選択する機会をもつこと、時にはベテラン教員の回答(指導)の場を設定すること、教員自身で課題を解決していく機会を設定することなど、この二つの要素を高める働きかけをすることで、さらなる主体性の向上を図ることが課題としてあげられる。

2点目は、研修を主催するリーダー育成の課題である。本研修会は、ベテラン教員でもある筆者と協力者が、若年教員育成の目的を共有して開催したものである。ただ、若年教員同士のみで学び合うだけでなく、3(1)で分析したように、講義形式の研修の意義を感じている教員も少なからずいたこと、また、指導や回答を求めている教員もいたという課題が見えたことから、研修の場を設定したり、知識を伝えたりアドバイスしたりするベテラン、中堅教員は必要である。勤務校を超えたベテラン、中堅教員との「縦のつながり」(カ)の必要性である。本研修は、筆者と協力者が「若年教員を養成する」という共通の目的をもって、

主体的に運営したものである。そこに、若年教員との「縦のつながり」が生まれていた。自主的な研修会が少なくなってきた現在の¹²、研修を企画、運営するリーダーの育成、とりわけ「研修会を開催しよう」とする意欲をもった教員の主体性の育成は、若年教員より今後さらに求められると言える。そうしたリーダーをどう養成していくかも、今後の大きな課題となる。この課題について検証、改善していく際にも、本稿で分析の観点としたオーナーシップに着目した研究が有効になると考える。

注

- 1 例えば、香川県の中学校教員の自主研修組織である香川県中学校教育研究会における夏季研修会の県内教員の参加率は、ほぼ2/3ほどであり、1/3の教員は会員でありながら参加していない現状がある。また、近年は、新型コロナウイルスの感染拡大により、多くの研修会が中止になったりオンライン研修に変更になったりしたことで、「研修に対する意識が低下した」との報告も多く聞かれる。
- 2 川田英之「国語科若年教員の授業力向上に関する一考察」香川大学教育学部附属教育実践総合センター『香川大学教育実践総合研究 第32号』、2016、3月、15-26頁
- 3 オーナーシップについては、国語科授業における菊田の論考がある。(菊田尚人「国語科での『学習としての評価』において学習者オーナーシップに着目することの可能性」日本国語教育学会『月刊国語教育研究No.599』2022、3月、44~51頁)本稿では、菊田が国語科授業における主体性を評価する指標として「オーナーシップ」に着目した視点を、教員の研修の評価に援用して論じる。
- 4 この他に香川県では、香川県教育委員会主催の教職1年経験者研修、教職20年経験者研修等が行われている。
- 5 教育基本法9条
- 6 教育公務員特例法21条
- 7 Milner-Bolotin, M, The effect of topic choice in project-based instruction on undergraduate physical science student's interest, ownership, and motivation. Austin, TX: University of Texas Press, 2001, 40頁
- 8 主に大西小百合氏(三豊市教育委員会主任指導主事一当時)の協力を得、協働しながら三豊市危機管理センターにて実施した。また、小玉祥平氏(三豊市教育委員会センター長一当時)にも、アドバイザーとして毎回参加、協力いただいた。
- 9 庄井良信は、授業における教師のかかわりとして、作家の共同体の例を挙げ、「ベテラン作家としての教師は、ある作

品についてのテキスト解釈は堅持しているが、その解釈へと故意に誘掖することはしない。アトリエに集う新進気鋭の作家である子どもたちと向き合ったときに、一流のベテラン作家ならば、何よりもはじめに、新進気鋭である子どもがその作品をどう読んだかということ聴くはずである。ここで自分の読みを演説するようでは、しょせん二流作家である。作家の共同体では、気鋭の新進作家の読みを味わいつつ聴きとりながら、ベテラン作家は深く自己内対話をはじめ。そして、自分の見解があるときは堂々と自分の見解を提示し、立ちどまり困惑するときには、演技ではなく正直に問いかける。」と述べる。(庄井良信『癒しと励ましの臨床教育学』かがわ出版、2002、161頁) 筆者および協力者も、まず参加者の語りを聴く、また、語り同士をつなぐ、逆に問い返すといった、庄井の述べるベテラン作家としてのかかわりを心がけて運営した。

10 注2に同じ。22-23頁

11 例えば、公的機関が研修講座を多数用意し、教員が選択して参加する形などはその一つである。ただし公的機関の研修の場合、年間通してほぼ同じ参加者が、同じ専門分野の研修をしていく形で行うことは困難である。

12 志水宏吉は香川の学力の高さを支えるものとして、昭和20年代から始まった、参加率の極めて高い教科別の自主研修会の存在を挙げている。(志水宏吉・高田一宏編著『学力制作の比較社会学 国内編 全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』明石書店、2012) しかし、香川県においては、以前各市町にあった各教科の自主研修会の場も、現在はほとんどなくなったり、下火になったりしているのが現状である。